# みやざきの俳句

## ―その系譜と俳人たち―

宮崎県俳句協会会長
長友　巖

# 目次

Ⅰ　はじめに
—俳句との出合い・私の場合—
Ⅱ　俳句の歴史
1　俳諧から近代俳句へ
(1)　俳諧
◎その起こりと流れ
◎宮崎の俳諧
(2)　近代俳句へ
◎明治・大正期の俳句
◎明治・大正期の宮崎
◎昭和前期の俳句
◎昭和前期の宮崎
2　現代俳句の諸相
◎進歩的傾向の台頭
◎戦争体験—反戦・平和の句
◎俳句の国際化
3　みやざきの潮流
◎ホトトギスから戦争体験句まで
Ⅲ　みやざきの先駆者たち
1　杉田作郎
2　小田黒潮
3　神尾季羊
4　高堂素棲
5　柏原和男
6　高松雀村
7　竹内一笑
8　前原東作
9　山下　淳
10　田崎賜恵
11　神尾久美子
Ⅳ　県内俳句団体等の状況
1　県内の広域主要俳句団体
◎宮崎県俳句協会
◎俳人協会宮崎県支部
◎宮崎県現代俳句協会
2　県俳句協会を支えた人々
3　県内俳句グループと俳誌
◎俳句グループ
◎主な俳誌
Ⅴ　まとめ

凡例
○俳句作品の頂部に☆印があるのは宮崎県在住またはゆかりの作家の作品

## Ⅰ　はじめに ―俳句との出会い・私の場合―

本題の前にまず私自身のことをいえば、俳句を始めて六十年余。初学はホトトギス系。高浜虚子の俳誌「ホトトギス」の雑詠欄で巻頭を二度占めた郷里の先輩小田黒潮指導の「草萌俳句会」に初めて参加したのは、新制中学校を終えるころだった。高校に進むとやがて熊本の「阿蘇」や高知の「勾玉」に投句、「阿蘇」の投句雑詠欄に神尾季羊・三輪秋葉などの名があるのを知った。

大学在学中の空白期間を置いて、就職した職場で高松雀村に出会い、藤後左右が代表をしていた鹿児島の同人誌「天街」に参加。ここで、いわゆる「前衛俳句」に触れ傾斜していった。藤後左右は鹿児島県生れ。京大俳句会に入りホトトギスに投句、昭和四、五年ごろその雑詠欄で中村草田男らと競った。「京大俳句」の創設に加わり、「俳句弾圧事件」には厄を免れたが廃刊とともに作句活動を中止するという経歴を持つ。

私が最も句作に熱中したのは、小島静螂・山下淳らの宮崎俳句研究会に入り「錆」、そして金子兜太の「海程」同人となった三十代のころ。若い日、最も影響を受けたのは静螂・淳・兜太だった。

その後、長い中断を経て俳句に戻ったのは、定年を迎えるころ。そのころ編んだ初句集「風の歳月」を届けた神尾季羊さんから手紙をいただき、古くからの句友の皆さんらと句集出版のお祝い会を開いてもらった。季羊さんとの交流は、季羊邸を会場にした宮崎県俳句協会設立準備時などに交歓した程度で実作面での交流はなかったが、当時から温かく見守っていただいていたことを知りうれしく思うとともに、俳句の縁の不思議さ深さを感じたことだった。

たしかに、初学のころに比べればいま私の俳句は大きく変わった。ホトトギスの伝統に戻ったわけでもかつての前衛のままでもなく、さまざまな姿をもつ現代俳句に行き着いたというべきだろうか。

俳句を問い直すなかで初学のころを思い出しながら、一昨年「俳句・名句と宮崎の秀句で学ぶ」をまとめた。自分自身、まだまだ俳句は分かっていない。多くの人の句に学びながら、悪戦苦闘の日々である。俳句づくりの上で大事なことの一つは、身近な仲間を含む多くの俳人の作品を読むこと。読むたびに教えられる。

その意味で本書では、古今の名句とともに郷土宮崎の俳句作家の秀句をできるだけ多く提示して、実作の参考に供するよう心がけた。郷土の作家たちの俳句を身近に感じてもらいたい、広く世に知ってもらいたいとの気持ちからである。収録した作家数は三百八十一人（うち本県作家は百六十五人）、句数は八百八句（うち本県作家は三百五十一句）。

本稿は「みやざきの俳句―その系譜と俳人たち」としたが、「みやざきの俳句」という特別なものがある訳ではない。「俳句・名句と宮崎の秀句で学ぶ」を下敷きに、全国的流れの中で本県の俳句と作家たちを見て行きたい。

## Ⅱ　俳句の歴史

### 1　俳諧から近代俳句へ

#### (1) 俳　諧

**◎その起こりと流れ**

俳句は明治時代になってつけられた呼び名で、江戸時代は「俳諧」といわれた。

俳諧はもともと、中世（十二世紀末から十六世紀末）に流行した文芸である連歌の「発句」の形式を継承したものといわれる。「発句」は連歌や連句の第一句で、五七五の三句十七音からなっている。

室町末期（十六世紀）にこの「発句」が独立した詩となって「俳諧」と呼ばれ、江戸初期（十七世紀初頭）、松永貞徳らの貞門・西山宗因らの談林派に受け継がれて広く普及した。

もともと連歌から派生した俳諧は「座の文芸」であり、社交の術の一つであった。連歌では、主賓が第一句（五七五）を亭主に挨拶句として送り、亭主は第二句（七七）で挨拶を返し、座に集まった三人目からは五七五で前句を受けて五十句、百句と挙げ句（最後の句）まで続ける形が一般的であった。初期は遊戯的なものが多く、点者を置き賞品を賭けて優劣を競ったという。

そのような連歌から独立した俳諧を、江戸前期（一六〇〇年代後半）、松尾芭蕉が全人格と関わる形でこれに高い文芸性を与えた。芭蕉は俳諧を風雅（詩歌）の道とし、寂（閑寂の情調）・栞（人間や自然への想いが句の姿に現われること）・細み（内容的深さ）を理念とする蕉風を確立した。その俳諧は芭蕉没後一時退廃し、江戸後期（一七〇〇年代半ば）、与謝蕪村による復興の時代を経て幕末には再び俗化した。

松尾芭蕉（一六四四～一六九四）は伊賀上野（いまの三重県伊賀市）生まれ。江戸前期の俳人で、江戸に出て蕉風を創始、俳句を文芸に高めた。各地を旅して多くの名句と紀行文を残し、難波（大阪）の旅舎で没。句集に「俳諧七部集」、紀行文に「野ざらし紀行」「奥の細道」などがある。俳聖といわれる。

行く春や鳥啼き魚の目は泪　松尾芭蕉（一六四四～一六九四）
応々といへど敲くや雪の門　向井去来（一六五一～一七〇四）
この下にかくねむるらん雪仏　服部嵐雪（一六五四～一七〇七）
鐘ひとつ売れぬ日はなし江戸の春　宝井其角（一六六一～一七〇七）
菜の花や月は東に日は西に　与謝蕪村（一七一六～一七八三）
是がまあつひの栖か雪五尺　小林一茶（一七六三～一八二七）

「俳諧」の語には「おどけ・たわむれ・滑稽」の意味があり、「古今和歌集」に「俳諧歌」の部があり滑稽な和歌を収めている。文芸としての「俳諧」から派生したものに「川柳」がある。

### ◎宮崎の俳諧

江戸中期から後期にかけて宮崎・延岡・日南など県内各地で俳諧が盛んに行われた。城ヶ崎俳壇の俳祖とも位置づけられる飫肥の小村西ト（西木）、高鍋藩藩士でのち全国を無銭托鉢し「日本九峯修行日記」を著わした野田泉光院（俳号・楊柳軒一葉）、延岡の商人でのち大阪に定住、「はしり穂集」の編著がある五木庵五木などがいる。

宮崎市城ヶ崎（恒久三丁目）にこの時期の俳人たちの、いわゆる「俳人墓地」が残っている。寛政元（一七八八）年、宝泉寺に仁王像が建てられた頃、城ヶ崎俳壇の活動は全国的に知られていたという。

墓碑に刻まれているのは小村（日高）家、太田家、南村家のほか大野猶穐などである。墓域の前列右から主に太田家俳系が並び大田可笛・足馬・無声らが。後列には二松亭俳系、すなわち小村（日高）家の日高西雪・菊路・小村五明など。さらに南村家俳系の梅雪・梅雨・梅家など。墓地移転の折り相当の俳人墓碑が失われたとのことである。墓域は昭和四十七（一九七二）年三月、「城ヶ崎俳人墓群並びに板碑群」として宮崎市指定史跡となっている。

なお城ヶ崎俳壇は、当時、芭蕉顕彰運動の一翼を担った。ほぼ同じ時期に高岡俳壇、本庄俳壇、清武俳壇などがあり、城ヶ崎俳壇が中核的役割を果たしつつ交流したといわれる。

☆日をさぼし二万五千の梅の花　日高西雪（一七四二没）
☆はひ上る速日の峰や蔦かつら　日高菊路（一七七三没）
☆木蒐の眼もすさまじや生目宮　太田可笛（一八一五没）
☆解る雪神の産屋の乳房かな　小村五明（一八二〇没）
☆卯の花やふき合せさる月の洩　太野猶穐（一八三四没）
☆目を祈る人や花にも手をかさし　小村路牛（一八三九没）
☆四つの苦を洗ふ湯殿や霧時雨　野田泉光院（一八三五没）
☆散梅や暖い寒いに拘らず　五木庵五木（一八四八没）

## (2) 近代俳句へ

### ◎明治・大正期の俳句

ここで近代俳句とは、正岡子規が俳諧革新運動を起こした明治中期（一八九〇年ごろ）から、太平洋戦争が終結した昭和二十（一九四五）年までをいうことにする。近代俳句は、明治二十年から三十年代（一八九〇年前後、正岡子規の俳諧革新運動を中心に興り、写生をもって自然の美をあるがままに写そうとした。

正岡子規（一八六七～一九〇二）は愛媛県松山出身で、明治期の俳人・歌人。東京大学在学中から俳句を研究、新聞「日本」の記者となり、「獺祭書屋俳話」を連載して俳諧革新運動を開始。病床の身で文学に専念、俳誌「ホトトギス」を中心に俳句活動を行った。

子規が亡くなってから俳諧革新運動は河東碧梧桐、高浜虚子らに引き継がれ、明治末年（一九一〇年ごろ）には碧梧桐、大須賀乙字らが新傾向俳句を唱え、荻原井泉水らの自由律も興った。これに対し虚子は花鳥

諷詠を唱え、「ホトトギス」によって活躍、その影響は現在にまで及び俳壇の主流の位置を占めてきた。

虚子（一八七四～一九五九）は愛媛県松山出身、明治期の俳人・小説家。子規に従って俳句を作り、柳原極堂から「ホトトギス」を継承（経営権買収）してその発展を実現した。碧梧桐らの新傾向俳句を批判して、「客観写生」「花鳥諷詠」を説き俳句の伝統擁護に努めた。また、多くの後進を育て、大正から昭和の俳壇隆盛の基を築いた。

ホトトギス系、新傾向俳句、自由律俳句の作家と作品を例示すると、次のようなものがある。

**◇ホトトギス系**

生きかはり死にかはりして打つ田かな　村上鬼城（一八六五～一九三八）
柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺　正岡子規（一八六七～一九〇二）
遠山に日の当りたる枯野かな　高浜虚子（一八七四～一九五九）
冬山やどこ迄登る郵便夫　渡辺水巴（一八八二～一九四六）
芋の露連山影を正しうす　飯田蛇笏（一八八五～一九六二）
頂上や殊に野菊の吹かれ居り　原石鼎（一八八六～一九五一）
寒雀躯を細うして闘へり　前田普羅（一八八四～一九五四）
短夜や乳ぜり泣く児を須可捨焉乎　竹下しづの女（一八八七～一九五一）
切凧の敵地へ落ちて鳴りやまず　長谷川かな女（一八八七～一九六九）
足袋つぐやノラともならず教師妻　杉田久女（一八九〇～一九四六）
咲くよりも落つる椿となりにけり　水原秋桜子（一八九二～一九八一）
さみだれのあまだればかり浮御堂　阿波野青畝（一八九九～一九九二）
心太煙のごとく沈みをり　日野草城（一九〇一～一九五六）

**◇新傾向と自由律俳句**

砂のある飯に馴れけり蕪汁　菅原師竹（一八六三～一九一九）
駒草に石なだれ山匂ひ立つ　河東碧梧桐（一八七三～一九三七）
那須の野へ来て日盛りや鳶の声　岡本癖三酔（一八七八～一九四二）
山畑に庵結ぶや棕櫚の花　大須賀乙字（一八八一～一九二〇）
分け入っても分け入っても青い山　種田山頭火（一八八二～一九四〇）
焚火ごうぐ燃え立ち人らだまりたり　荻原井泉水（一八八四～一九七六）
一日物云はず蝶の影さす　尾崎放哉（一八八五～一九二六）

**◎明治・大正期の宮崎**

本県では、明治三十年代の初め、東大眼科教室にいた青年俳人・杉田作郎が帰郷、子規や虚子の選を受けながら、九州俳壇における「ホトトギス派」の発信地として、近代宮崎俳句を出発させた。しかしやがて、子規派主流の写生句に飽き足らなくなった作郎は大正初年、井泉水の「層雲」に参加し同人となり、積極的に自由律俳句を発表した。

**◇ホトトギス系**

☆禰宜酔ひてねむり上戸や戎講　杉田作郎（一八六九～一九六〇）
☆夏痩せて兵子帯長くなりにけり　黒木紅足馬（一八八五～一九六四）

**◇新傾向と自由律俳句**

☆柿の赤さはつゝみきれない　杉田作郎（一八六九～一九六〇）
☆広い葉となり細い葉となり明るい風ある　中島闘牛児（一八八一～一九五九）
☆天地黙す糸瓜忌の夜の月もなき　黒木紅足馬（一八八五～一九六四）

**◎昭和前期の俳句**

高浜虚子の「ホトトギス」の大きな流れの一方で、新たな俳句の流れが生まれた。昭和初年（一九三〇年前後）には水原秋桜子・山口誓子らの新興俳句が興り清新自由な句境を志し、さらには栗林一石路などのプロレタリア俳句、石田波郷・加藤楸邨・中村草田男らの人間探究派などの動きが興った。そのほか馬酔木・天狼・雲母系などがある。この時期の主な作品例は次のとおり。

**◇ホトトギス**

流れゆく大根の葉の早さかな　高浜虚子（一八七四～一九五九）
金剛の露ひとつぶや石の上　川端茅舎（一八七九～一九四一）
みちのくの町はいぶせき氷柱かな　山口青邨（一八九二～一九八八）
方丈の大庇より春の蝶　高野素十（一八九三～一九七六）
曼珠沙華抱くほどとれど母恋し　中村汀女（一九〇〇～一九八八）
秋の航一大紺円盤の中　中村草田男（一九〇一～一九八三）
水仙の花のうしろの蕾かな　星野立子（一九〇三～一九八四）

芥子咲けばまぬがれがたく病みにけり　松本たかし（一九〇六～一九五六）
萩の野は集つてゆき山となる　藤後　左右（一九〇八～一九九一）

◇新興俳句

来しかたや馬酔木咲く野の日のひかり　水原秋桜子（一八九二～一九八一）
ラガー等のそのかち歌のみじかけれ　横山　白虹（一八九九～一九八三）
兵隊が征くまつ黒い汽車に乗り　西東　三鬼（一九〇〇～一九六二）
夏の河赤き鉄鎖のはし浸る　山口　誓子（一九〇一～一九九四）
蝶墜ちて大音響の結氷期　富澤赤黄男（一九〇二～一九六二）
山陰線英霊一基づつの別れ　井上白文地（一九〇四～一九四六）
街燈は夜霧にぬれるためにある　渡邊　白泉（一九一三～一九六九）
怒りつつ書きゐしはわが本名なり　鈴木六林男（一九一九～二〇〇四）
少年ありピカソの青のなかに病む　三橋　敏雄（一九二〇～二〇〇一）

◇プロレタリア俳句

冬空のビルジングの資本の攻勢を見ろ　栗林一石路（一八九四～一九六一）
痛むような青空で仕事がありやしない　小澤　武二（一八九六～一九六六）
この集団が動くのだ　まっかな旗がつづくのだ　橋本　夢道（一九〇三～一九七四）
機械が油をほしがって夜更けてきた　横山　林二（一九〇八～一九七二）
集まってかたまって黙って吹雪かれて行く　北原良子

◇人間探究派

**俳句における人間の探求・人間性回復**

万緑の中や吾子の歯生え初むる　中村草田男（一九〇一～一九八三）
蟇　誰かものいへ声かぎり　加藤　楸邨（一九〇五～一九九三）
今生は病む生なりき鳥頭　石田　波郷（一九一三～一九六九）

◇その他

郭公や何処までゆかば人に逢はむ　臼田　亜浪（一八七九～一九五一）
くろがねの秋の風鈴鳴りにけり　飯田　蛇笏（一八八五～一九六二）

月光にいのち死にゆく人と寝る　橋本多佳子（一八九九～一九六三）
ふところに入日のひゆる花野かな　金尾梅の門（一九〇〇～一九八〇）
蟋蟀が深き地中を覗き込む　山口　誓子（一九〇一～一九九四）
百方に借あるごとし秋の暮　石塚　友二（一九〇六～一九八六）

◇自由律

うしろ姿のしぐれてゆくか　種田山頭火（一八八二～一九四〇）
空を歩む朗朗と月ひとり　荻原井泉水（一八八四～一九七六）

**◎昭和前期の宮崎**

昭和前期の宮崎県内の俳句の流れはよく分からないが、おそらく全国的な流れを受ける形であったろうと思われる。なお、自由律俳句で活躍した杉田作郎は昭和初期のこの時期、宮崎を訪れた流浪・無頼・異端の自由律の俳人種田山頭火を、「層雲」の仲間である黒木紅足馬・中島闘牛児らとともに温かく迎えて交流した。

◇ホトトギス

☆もやもやとえのころ草の枯れにけり　小川素風郎（一八九三～一九四五）
☆滞陣や蘆の芽水を抽きそめし　小田　黒潮（一八九六～一九七八）
☆渋鮎のまじり初めたる生簀かな　田村梨雨城（一八九六～一九八〇）

◇自由律等

☆大きな寺の昼の静けさ掃出す　杉田　作郎（一八六九～一九六〇）
☆こんな草にも春が来ている波がしら　黒木紅足馬（一八八五～一九六四）

## 2　現代俳句の諸相

### ◎進歩的傾向の台頭へ

虚子の「ホトトギス」系が主流を占めるなか、太平洋戦争が終結した戦後になると社会性俳句論が展開され、広い意味での社会主義的イデオロギーを根底に持った進歩的傾向の俳句が興った。中村草田男・沢木欣一・能村登四郎・原子公平などがいる。

これに続く形で昭和三十年代以降、前衛俳句が興った。富沢赤黄男・高柳重信・金子兜太・島津亮・堀葦男らがいる。またこの時期、山口誓子を中心とする「天狼」系が「根源俳句」を唱え、結果的に新興俳句と伝統俳句の融合が試みられた。

**◇ホトトギス系**

爛々と昼の星見え菌生え　高浜虚子（一八七四～一九五九）
畷、といふ痛さうな言葉かな　富安風生（一八八五～一九七九）
落葉してからりと高き一樹かな　河野静雲（一八八七～一九七四）
雉子の尾の落花にふれて歩きをり　野見山朱鳥（一九一七～一九七〇）
冬の海鮫の百尾もゐるごとし　藤崎久を（一九二一～一九九九）
燃え尽きし枯菊として残る嵩　稲畑汀子（一九二一～）

**◇社会性俳句**

基地の子に河岸の辛夷がパラつと咲く　加倉井秋を（一九〇九～一九八八）
鉄からさずかる汗拭くぼつたり鰯雲　和知喜八（一九一三～二〇〇四）
主婦たゝら踏むメーデーやヒロシマに　沢木欣一（一九一九～二〇〇一）
夏芝の花文字基地の有刺線　原子公平（一九一九～二〇〇四）
湾曲し火傷し爆心地のマラソン　金子兜太（一九一九～）

**◇前衛俳句**

草一本だけ生えてゐる　時間　富澤赤黄男（一九〇二～一九六二）
奇異な雨の大暗黒を銀行占む　堀葦男（一九一六～一九九三）
怒らぬから青野でしめる友の首　島津亮（一九一八～二〇〇〇）
わが湖あり日蔭真暗な虎があり　金子兜太（一九一九～）
まなこ荒れ／たちまち／朝の／終わりかな　高柳重信（一九二三～一九八五）

**◇馬酔木・天狼・雲母系など**

いなびかり北よりすれば北を見る　橋本多佳子（一八九九～一九六三）
秋の暮大魚の骨を海が引く　西東三鬼（一九〇〇～一九六二）
いづかたも水行く途中春の暮　永田耕衣（一九〇〇～一九九七）
冷されて牛の貫禄しづかなり　秋元不死男（一九〇一～一九七七）
行く雁の啼くとき宙の感ぜられ　山口誓子（一九〇一～一九九四）
おぼろ夜のかたまりとしてものおもふ　加藤楸邨（一九〇五～一九九三）
藁塚に一つの強き棒挿さる　平畑静塔（一九〇五～一九九七）
白く又黒きひかりの冬の旅　高屋窓秋（一九一〇～一九九九）
雪はしづかにゆたかにはやし屍室　石田波郷（一九一三～一九六九）
蜂飼いのアカシアいま花日本海　占沢太穂（一九一三～二〇〇〇）
くらがりに歳月を負ふ冬帽子　石原八束（一九一九～一九九八）
塩田に百日筋目つけ通し　沢木欣一（一九一九～二〇〇一）
天上も淋しからんに燕子花　鈴木六林男（一九一九～二〇〇四）
父母の亡き裏口開いて枯木山　飯田龍太（一九二〇～二〇〇七）
雁ゆきてまた夕空をしたたらす　藤田湘子（一九二六～二〇〇五）
春雷は空に遊びて地に降りず　福田甲子雄（一九二七～二〇〇五）
天瓜粉しんじつ吾子は無一物　鷹羽狩行（一九三〇～）

**◇その他のグループ**

ほつかり月が出て黄ろな花ばかり　秋山秋紅蓼（一八八五～一九六六）
石鉢の底歴然とある　青木月楼（一八八七～一九六八）
陽へ病む　大橋裸木（一八九〇～一九三三）
翁かの桃の遊びをせむと言ふ　中村苑子（一九一三～二〇〇一）
ごはんつぶよく噛んでゐて桜咲く　桂信子（一九一四～二〇〇四）
夕焼雀砂浴び砂に死の記憶　穴井太（一九一六～一九九七）
草餅を焼く天平の色に焼く　有馬朗人（一九三〇～）
未来図は直線多し早稲の花　鍵和田秞子（一九三一～）
百千鳥ほんとうは来ぬ朝もある　宇多喜代子（一九三五～）
さまざまな蛇持ち寄るや雲の下　安井浩司（一九三六～）
父を焼き師を焼き蓬餅あをし　黒田杏子（一九三八～）
産むというおそろしきこと青山河　寺井谷子（一九四四～）
雪の日のそれはちひさなラシャ鋏　中岡毅雄（一九六三～）

**◎戦争体験―反戦・平和の句**

現代俳句の流れを見る時、忘れられないのが「戦争体験」と「俳句の国際化」である。

まず戦争体験―。日本ではこの六十有余年、幸い「戦争」を遠いものとして暮らしており、戦争の実体験のない世代がほとんどになっている。しかし、世界のあちこちで戦火は絶えず、イラク・エジプトは落ち着いたが、アフガニスタンやパキスタン、イスラエル、シリアなどの各地で大小さまざまな形で戦火やテロ・暴力が止まない。日本も自衛隊を中心に給油活動や復興支援活動を通して戦争・復興に関わってきた。先の見えないそんな現実がある。

私が生まれて間もなくのころ、日中戦争が始まった。昭和十二（一九三七）年である。やがて太平洋戦争に拡大して欧米も加わり、第二次世界大戦に広がっていった。

俳句の世界で「近代的革新」をめざした「新興俳句運動」が起こったのはこの少し前。この運動は青年層を中心に、近代的抒情・感覚的表現・思想性や社会性の表出へと動いていった。昭和十五（一九四〇）年に俳誌「京大俳句」のメンバーが治安維持法違反容疑で検挙投獄されるなどして終息、その五年後、わが国は敗戦という余りにも大きな代償を払って戦争を終結した。

空襲や肉親の戦死、さらには米軍による沖縄地上戦、広島・長崎の原子爆弾投下などの悲惨な戦争体験を少年時代にもつ最後の世代である私たちには、忘れられない時代があった。

私たちは戦争体験世代の一人として、戦争の悲惨さと平和の尊さを後世に伝え続け訴え続けていかなければならない責任と深い思いがある。「新興俳句」時代の先人の句を含めて反戦・平和の句をいくつか見てみよう。

闇ふかく兵どどと着きどどとつく　片山桃史（一九一二～一九四四）
戦死せり三十二枚の歯をそろへ　藤木清子（？）
戦争が廊下の奥に立つてゐた　渡邊白泉（一九一三～一九六九）
雲が首灼く浦上花をもつと蒔こう　隈治人（一九一五～一九九〇）
永遠に孤りのごとし戦傷の痕　鈴木六林男（一九一九～二〇〇四）
母の手に英霊ふるへをり鉄路　高屋窓秋（一九一〇～一九九九）
なにもかもなくした手に四まいの爆死証明　松尾あつゆき（一九〇四～一九八三）
原爆許すまじ蟹かつかつと瓦礫あゆむ　金子兜太（一九一九～　）
腋へ梅雨傘水爆反対署名なす　伊丹三樹彦（一九二〇～　）
戦どこかに深夜水のむ嬰児立つ　赤尾兜子（一九二五～一九八一）
十二月八日味噌汁熱うせよ　桜井博道（一九三二～一九九一）
戦争に結界なくてえごの花　岸本マチ子（一九三四～　）

## ◎俳句の国際化

いま俳句は、「HAIKU」として世界の多くの国へ拡がっている。

俳句が海外に紹介されたのはかなり古く、寺井谷子の「俳句の海へ言葉の海へ」によると、一八九九年にはイギリスのアストンが俳諧や俳文を、一九〇二年には同じくイギリスのチェンバレンが芭蕉を、一九〇五年にはフランスのクーシューが、一九一〇年にはルヴォンがその著書で「俳諧」を紹介している（明治末期）。

さらに、昭和二（一九二七）年にはフランスの駐日大使ポール・クローデルが「俳句」の形式を借りて、百七十二編の短詩を「百扇帖」にまとめて発表している。

また欧米、ことにフランスを中心に一九一〇年代から二〇年代（主に大正期）にかけてハイカイ風四行詩の運動が活発になったほか、昭和十一（一九三六）年には高浜虚子が渡欧して外国の詩人や俳人と交流するなどしたが、戦後すぐにはイギリスの文学者R・H・ブライスが禅と俳句・芭蕉・蕪村・一茶・正岡子規を紹介し解説しており、その功績は非常に大きいということである。イギリスにはイギリス俳句協会ができている。

HAIKU事情に詳しい宮崎市の福富健男によると、昭和五（一九三〇）年ごろには旧ユーゴスラビアに俳句が入り、その後、数学者として東京大学に留学していたウラジミール・デビイデがその基礎づくりに大きく貢献したということである。

アメリカの俳句の基礎が築かれたのは一九五〇年代といわれる。前述のイギリス人ブライスと、俳句を実作したJ・W・ハケットが重要な役割を果たしたとされる。

中国の漢俳は、昭和五十五（一九八〇）年の日本俳人協会大野林火ら

の訪中に始まるようである。その後、平成八（一九九六）年には北京で第一回「日本中国俳句・漢俳交流会」が開催されるなど交流が進んでいる。

平成十二（二〇〇〇）年にはスロベニアで世界俳句協会（WHA）が設立され、インターネットのホームページが立ち上げられたほか、「世界俳句フェスティバル」が開催されている。

現代俳句協会では昭和六十一（一九八六）年に国際部を設置、継続的に研究会を開いて推進を図っている。平成元（一九八九）年には国際俳句協会が発足している。

## 3　みやざきの潮流

### ◎ホトトギスから戦争体験―反戦・平和の句まで

宮崎県内では、戦後早々の昭和二十一（一九四六）年、神尾季羊の呼びかけで発足した山脈句会（のち白庭句会）、都城俳句研究会、若竹句会、小林句会などが活動した。

昭和二十三（一九四八）年に三輪秋葉が創刊した俳誌「椎の実」は創刊の四年後、綾町の「ホトトギス」同人小田黒潮が主宰となり、その二年後の昭和二十九（一九五四）年に神尾季羊がそれを引き継いで、「椎の実」は現在まで本県俳壇を牽引してきている。季羊没後、神尾久美子が主宰となり、地方結社誌としては全国でも例がない誌齢六百五十号を数えている。

本県で初めて現代俳句の同人誌「火山脈」が発刊されたのは、昭和三十一（一九五六）年。伝統俳句に物足らなく社会の現実に目を向け新しい形式や内容を模索する山口聖二・高堂素棲・蛯原喜荘・小島静螂・山下淳らがその中心だった。二年二ヵ月、十一号で終刊、その後、その流れは宮崎俳句研究会に引き継がれ蛯原喜荘・高堂素棲・小島静螂・山下淳らによる「鯖」（昭和三十六年創刊）、山下淳・福富健男らによる「流域」（昭和四十五年創刊）へと繋がっていった。

当然のこととして、戦争体験を詠んだ句、国際化へのトライも実証される。平成二十三（二〇一一）年、福富健男が英訳句集「In the Bird's Eye」を出版している。

杉田井蛙（作郎の子）は昭和四十二（一九六七）年に「層雲」の井泉水門に入り、昭和四十八（一九七三）年「宮崎根の会」を主宰し自由律俳句の発展に努めた。「根の会」はその後も着実に活動してきた。

**◇ホトトギス系**

☆夕刊も血の垂る寒の鰤も見ず　小田黒潮（一八九六～一九七八）
☆植うるもの心に寒の明くる待つ　山田背史（一八九八～一九八五）

**◇社会性俳句**

☆爆心地の沖へ抜き手の父の眼力失せ　山口聖二（一九〇〇～一九八五）
☆ニコヨン昼餉す燕日焼けて鋭き艶　高堂素棲（一九一八～一九六一）
☆基地に馴れ凶年に馴れ落し水　鈴木哲哉（一九二七～一九八二）
☆外来語多し石榴は粒を噴く　佐土原岳陽（一九二〇～　）
☆平和展帽子目深に誰かがいる　永田伸（一九二一～一九八七）
☆沖縄や軽き頭蓋をもちあるく　小島静螂（一九三二～　）

**◇前衛俳句**

☆猫のような奴ばかりで寝棺に花を鎮め　山口聖二（一九〇〇～一九八五）
☆鱶を割いて漁夫の右手が長くなるか　山下淳（一九一三～二〇〇〇）
☆安静時間蜥蜴は青い色素を詰め　高堂素棲（一九一八～一九六一）
☆夜は遠嶺の鹿となる妻白布ゆたか　長友巌（一九三四～　）
☆大根を抜いておりかすかな鴉の青　福富健男（一九三六～　）

**◇馬酔木・天狼・雲母系など**

☆涅槃図の余白なきまで嘆きあふ　田崎賜恵（一九一二～二〇〇五）
☆野生馬の天や童胆よりも澄む　神尾季羊（一九二一～一九九七）
☆青き踏まな心貧しきときは出で　伊福丹助（一九二二～一九六三）
☆雪催ふ琴になる木となれぬ木と　神尾久美子（一九三三～　）
☆桐落花地中は音の透くならむ　布施伊夜子（一九三八～　）

**◇その他のグループ**

☆米たべていきて八十八のはる　杉田作郎（一八六九～一九六〇）
☆よい月の門しめる　杉田井蛙（一八九九～一九八八）
☆刈田雨は音なく降ってきて夕べとなる　服部春雪
☆月が寒うしていちごのしきわら　蜂須賀君子

☆こしかけて　ふゆの　そら　山口穂銘（一九三八～二〇一二）

◇戦争体験―反戦・平和を詠む

☆ベトナムの音がボトボト椿落つ　高松雀村（一九一五～一九八〇）

☆兵死ねば水をこぼしに鳥来るか　甲斐潮（一九二六～）

☆水仙よ空も海原も火であった　高尾日出夫（一九二七～）

☆再軍備絶対反対胸まで焚火　柏原和男（一九三一～一九六三）

☆浦上に被爆の影絵踏むごとく　永田伸（一九三一～一九八七）

☆妻子消えて繊細な歌降る被爆の丘　小島静鄙（一九三二～）

☆四の五のと言ふも戦死ぞ百日紅　佐藤守（一九三三～）

☆被爆地の蟹売る麻痺の手深く垂れ　長友巌（一九三四～）

☆敗戦忌蝉より多い蝉の穴　服部修一（一九五二～）

◇国際化

☆燕等に襲われる船員麦藁帽かぶる　福富健男（一九三六～）

A crew man / has his straw hat / attacked by swallows

## Ⅲ　みやざきの先駆者たち

### 1　杉田作郎（一八六九～一九六〇）

―ホトトギス・層雲で活躍、自由律を進めた―

宮崎市（旧佐土原町）生まれ、本名直。東大医局時代、善哉の号を用いて大野酒竹と親しく、角田竹冷・尾崎紅葉・巌谷小波らと秋声会を結んだ。明治三十一（一八九八）年帰郷、当時の宮崎町に眼科医院を開業、同時に初音会を起こし子規に師事。子規・虚子の選を受けながら、九州における「ホトトギス」発信基地として近代宮崎俳句を出発させた。

しかし子規派主流の写生句に飽き足らなくなり、大正初期から荻原井泉水の「層雲」へ転じ、自由律の長老俳人として活躍した。昭和三（一九二八）年五月、井泉水が来宮、作郎はのち「宮崎の層雲三羽がらす」といわれた黒木紅足馬・中島闘牛児と出迎えた。種田山頭火の再来宮、「層雲」中堅俳人の宮崎入りなどで、宮崎の自由律は隆盛の時を迎え昭和十（一九三五）年代は自由律俳句一色の様相さえ呈した、と山口穂銘は書いている（「宮崎県の俳句」）。

作郎と種田山頭火の交流は昭和五（一九三〇）年九月二十五日。山頭火二回目の日向路への旅の時である（一回目は大正十五年、行程は不明）。山口穂銘著「日向路の山頭火」によると、山頭火は都城から日向路北上の途中、作郎邸を訪ね、二十七日夜には、再度訪ねてきた山頭火を囲んで、闘牛児・紅足馬をまじえ酒を酌みかわし午前二時散会したと日記にある。

また、「山頭火さんなぞ、その当時未だ名も知られていなかったが、托鉢姿で足には木賃宿で借りられたらしい、ちびた埃だらけのひっきれ下駄を指にまきつけ、玄関に立たれた。その時も父は喜んで招じ入れ、早速町内の俳人の方々を非常招集して、歓迎句会を催した（作郎の四女・日高恵美子さん）」とある。

昭和三十（一九五五）年宮崎県文化賞（芸術部門）受賞。著書に「日向俳壇史」。「柿の赤さはつゝみきれない」の句碑が宮崎神宮の境内にある。昭和三十五（一九六〇）年十二月没、享年九十一。

米良山をやく火が見ゆる朧哉　作郎

行く雁に本ふせる

終戦一年の芋ほれば芋に子がある

### 2　小田黒潮（一八九六～一九七八）

―戦後の県俳壇の開拓者として後進を指導した―

高知市生まれ、本名城吉。海南中学から陸軍士官学校に進み、卒業後、大阪の第四師団に勤務。この時期ホトトギスに参加して俳句の道へ。「ホトトギス」の有力俳人阿波野青畝・鈴鹿野風呂・大橋桜坡子・五十嵐播水・山口誓子らと交流、田村木國の知遇を得た。木國は一時期新傾向に傾くも自然諷詠の穏やかな写生句が特色。

大正十一（一九二二）年には「ホトトギス」の上位作家に進出。同誌の巻頭を占めるなどした。当時、「ホトトギス」に入選することは特に地方俳人にとっては大きな栄誉であり、一句でも入選すれば赤飯を炊いて祝盃を上げたとのエピソードがある時代である。

昭和十三（一九三八）年に大隊長としてソ満国境の警備に、同十五（一

九四〇）年には南支派遣軍に転属。この時期、「白夜航く砲艦スターリンスキー以下」などの軍人俳句を発表している。

戦後、帰国後、綾町に帰り、県俳壇の開拓者として活動、「椎の実」を主宰するほか日向日日（現宮崎日日）新聞俳壇選者など担当し後進の指導に当たった。ホトトギス同人。のち雲母同人。句集に「大陸春秋」（昭和四十二年刊）。句碑が県内二カ所にある。

昭和五十（一九七五）年十二月没、享年八十二。

兵逝けり白夜明りに唇うごき　黒潮

巣立鳥なるべし唐招提寺裏

夕刊も血の垂る寒の鰤も見ず

## 3 神尾季羊（一九二一～一九九七）

―「椎の実」を主宰し戦後宮崎の俳壇を指導した―

愛媛県松山市生まれ、本名匡。生後まもなく宮崎市に移り学業を終え銀行員に。昭和二十（一九四五）年から「ホトトギス」に投句、野見山朱鳥を知り師事。朱鳥没後、藤田湘子の「鷹」に参加した。

黒潮のあとを受ける形で引き継いだ「椎の実」を昭和二十九（一九五四）年から没年まで主宰し、地方の主宰誌としては異例の五百号目前の号数を重ね、すぐれた作句活動の傍ら多くの後進を育てた。

この間、ＮＨＫ宮崎放送局のラジオ文芸俳句部門講師・日向日日（現宮崎日日）新聞俳壇選者、宮交シティ・カルチャー講座俳句部門講師など幅広く指導者として活躍し、本県俳壇の向上に尽くすとともに俳句人口の拡大、宮崎俳壇の今日の活況に貢献した。

昭和四十六（一九七一）年宮崎県文化賞（芸術部門）受賞。句集に「石室」「暖流」「椎」「同席」「日向」など。句碑は県内三カ所にある。

平成九（一九九七）年六月没、七十六歳。

浜木綿の花の上なる浪がしら　季羊

茅舎より朱鳥鮮烈朴の花

野生馬の天や龍胆よりも澄む

## 4 高堂素棲（一九一八～一九六一）

―宮崎に現代俳句の種を蒔いた―

東京都生まれ、本名進。昭和二十七（一九五二）年宮崎市に転居。その後、県立宮崎病院・保生会病院で療養。

大分の田原千暉の「石」の幹部会員、九州俳句協会幹事、「椎の実」「万緑」などで活躍した。「椎の実」の神尾季羊は、「伊福丹助は私の右手であり、高堂素棲は左手である」といったという。伊福丹助は同時代に「椎の実」で活躍した人で、この季羊・丹助・素棲の三人はともに肺結核療養の宿痾に苦しんだ。

昭和三十一（一九五六）年には「椎の実」の新鋭作家と「椎の実」外の作家を集めた同人誌「火山脈」をその中心となって立ち上げるなど、現代俳句への志向を示唆した。

昭和三十四（一九五九）年夏には発起人の一人として宮崎俳句研究会を発足させ、昭和三十六（一九六一）年二月、その機関誌として創刊した「錆」の編集発行人を小島静螂とともに担当した。両誌には県内の新鋭作家たちが集結した。

療養中に死去、身寄りとの連絡が取れないまま神尾宅で通夜。俳句仲間の手により遺句集に「ＤＥＬＴＡの雲雀」を刊行。一周忌に俳句仲間によって句碑が宮崎市住吉の泰翁寺に建てられた。

昭和三十六（一九六一）九月没、享年四十五。

安静時間蜥蜴は青い色素を詰め　素棲

或る日孤独雲と海とに虹つきさし

日焼ける平和犬眠る大地に顎おしつけ

## 5 高松雀村（一九一五～一九八〇）

―都城俳句研究会を創始し県南俳壇をリードした―

都城市生まれ、本名靖治。日本大学在学中から俳句を志し、水原秋桜子の「馬酔木」に拠った。

終戦後帰郷、昭和二十一（一九四六）年、都城俳句研究会を発足させ山口草蟲子（のちの黙）とも交流、県南俳壇の拠点を作った。

学校教員を経て都城市役所に勤務し職場や地域の句会等を指導、商

工観光課長などを務めたのち、天理教の布教に従事した。
鹿児島の「天街」に参加、藤後左右らと交流し新しい俳句をめざしたが、昭和四十九（一九七四）年「冬草」に参加し伝統的な句風に戻った。句集に「草莽」。「陽によって深入りすぎし大枯野」の句碑が都城市役所東隣の市立図書館前にある。
昭和五十五（一九八〇）年四月没、享年六十五。

野火追うて竹の長さに叩きけり　雀村
粥いっぱいだけの鼓動か霜おく夜
草莽の乱より百年書を曝す

## 6 柏原和男（一九三一～一九六三）

―社会性俳句を推し進めた―

宮崎市（旧高岡町）生まれ、本名同じ。「火山脈」「鏃」「石」などで、社会の矛盾や反戦の思いを激しく詠った。
小学校卒業後澱粉工場で働きながら地元青年会文化活動の一員として俳句などを作り、自宅で句会を開いた。その後、「石」発行の大分の田原千暉や栗林一石路など進歩的俳人の知遇を得て、昭和二十五（一九五〇）年、「石」発行所に寄寓。上京して俳句新聞の編集、紙芝居等を経て、箱根や岐阜のダム工事、大阪での港湾労働などに従事、病を得て帰郷し赤江療養所に入所、この時期山下淳と交流。
その後再び大阪に出て釜ヶ崎に住みつき、八村宏、釘宮浪愁らと交流、やがて失職、裸の会会員となっていた。昭和三十八（一九六三）年二月の深夜、釜ヶ崎の路上で愚連隊と見られる若者に襲われ三十二歳の若さで不慮の死を遂げた。
昭和三十七（一九六二）年「石年間賞」、死後「石」賞受賞。遺句集に「播州路」。郷里の墓地に「金欲しや晩夏の宙にひらく指（俳面）」「再軍備絶対反対胸まで焚火（碑陰）」の句墓碑がある。
なお、月刊「俳句界」（二〇一一年五月号・文学の森発行）の「特集　夭折の俳人たち」に村上護が和男の「阿呆のごとく日永の丸太百担ぐ（辞世）」などの句を紹介している。
昭和三十八（一九六三）年二月没、享年三十二。

再軍備絶対反対胸まで焚火　和男
金欲しや晩夏の宙にひらく指
阿呆のごとく日永の丸太百担ぐ（辞世）

## 7 竹内一笑（一九〇三～一九九一）

―「夜神楽」を季語に認知させた―

京都市生まれ、本名勲。四歳のとき高千穂町へ。昭和十三（一九三八）年に俳句を始め、臼田亜浪に師事。「椎の実」同人。昭和四十七（一九七二）年から「冬草」宮崎支部長。昭和四十八（一九七三）年宮崎県文化賞（芸術部門）受賞。「冬草」功労賞。
高千穂の夜神楽を独立した季語として広く認知させるのに功績があった。句集に「父と娘の句集」「空間」「祝者」「阿波岐」。句碑三基がある。
平成三（一九九一）年六月没、享年八十八。

夜神楽の幣に霊入れ祝者去りぬ　一笑
海へ帰る亀の後脚泳ぎをり
雲海の高さに目覚め故郷たり

## 8 前原東作（一九一五～一九九四）

―無季・口語俳句を提唱した吉岡禅寺洞の遺志を継いで

「形象」を創刊した―

愛媛県松山市生まれ、本名同じ。本籍地の鹿児島一中時代から俳句を始め、昭和八（一九三三）年「仙人掌（のち覇王樹）」を創刊。九州大学医学部在学中、「九大俳句」で活躍しながら無季・口語俳句を提唱する吉岡禅寺洞の俳誌「天の川」に参加、その編集にも携った。
昭和十八（一九四三）年ビルマの野戦病院に派遣され、帰国後、昭和三十一（一九五六）年小林市に前原整形外科医院を開院。昭和三十（一九五五）年三月に第一次「形象」、昭和四十一（一九六六）年に第二次「形象」、平成三（一九九一）年から第三次「形象」と先師禅寺洞の遺志を継いで現代俳句誌「形象」を主宰。禅寺洞の「俳句は強靭なる詩である」を「形象」の主題として創作・俳句評論を進めた。

平成六（一九九四）年宮崎県文化賞（芸術部門）受賞。句集に「形象俳句選集」、歌集に「距離」があり、没後『前原東作俳句集』が刊行された。

平成六（一九九四）年五月没、享年七十九。

昏い銀河螺旋階段つるつるのぼる　東作
どの古墳も草生え夕焼のように冷たい
五月を釣るひそかな虹の色を釣る

## 9 山下淳（一九一三～二〇〇〇）

―現代俳句を広く県内に根付かせた―

愛媛県生まれ、本名淳。大分中学校を経て鹿児島高農卒。俳句は昭和十八（一九四三）年在満部隊配属中に始め部隊内で俳句会を開き、ソ連抑留中も俳句を続けたため、封建的思想の持ち主としていわゆる「つるしあげ事件」に遭った。

昭和二十四（一九四九）年帰還後、「寒雷」の加藤楸邨に師事、昭和三十二（一九五七）年寒雷同人。昭和三十八（一九六三）年金子兜太の「海程」創刊とともに同人に。俳句研究誌「流域」を創刊、現代俳句を県内に広めるなど後進の指導に当たった。宮崎日日新聞俳壇選者も務めた。

昭和五十八（一九八三）年宮崎県文化賞（芸術部門）受賞。昭和六十三（一九八八）年地域文化功労文部大臣表彰。句集に「山麓」「南国」「緑域」「鳥声」「忘音」。

平成十二（二〇〇〇）年六月没、享年八十八。

底抜け炎天枇榔一樹がやわらかし　淳
牛の舌の粗さ明快なパイロット
ひょろひょろ歩く滑稽太平洋真青

## 10 山口聖二（一九〇〇～一九八五）

―新興俳句運動の一方の論客として登場、評論活動に注力―

鹿児島県生れ、前号草蟲子。吉岡禪寺洞に師事、「天の川」同人。昭和十四（一九三九）年「崖」創刊。県内高校・短大で教鞭、俳句活動を展開。昭和二十八（一九五三）年坂口涯子らと「俳句基地」創刊。無季俳句論・口語俳句論を執筆するなど「薔薇」「万緑」「形象」「海程」などで主に評論活動を行う。句集に昭和二十九（一九五四）年刊行の「蛇の髯」。大阪市へ転出。

昭和六十（一九八五）年没、享年八十四。

鷹遡りつつ叫べば黒潮は火の匂い　聖二
海彦の声さめざめと織る種子紬
裾野なる霧四肢ひたし牛めざむ

## 11 田崎賜恵（一九一二～二〇〇五）

―花鳥諷詠・客観写生の伝統俳句を志向した―

朝鮮平城生まれ、本名松代。「風花」に入り中村汀女に師事。昭和四十七（一九七二）年「冬草」「山茶花」同人、中村汀女句碑を鵜戸神宮境内に建立。風花宮崎支部長として会員を牽引、合同句集「花むしろ集」「白鷺」などを発行した。

全国俳句大会等で活躍。平成四（一九九二）年宮崎県文化賞（文化功労部門）受賞。句集に、夫婦句集「双燕」、「双燕（第二集）」「花ざぼん」「独り言」など。

平成十七（二〇〇五）年三月没、享年九十四。

涅槃図の余白なきまで嘆きあふ　賜恵
もう泣かぬ女となりし終戦日
ドア一つへだてし思ひ去年今年

## 12 神尾久美子（一九二三～　）

―現代俳句女流賞等を受賞した―

福岡県生まれ、本名洋子。昭和二十六（一九五一）年「菜殻火」の野見山朱鳥に師事。神尾季羊と結婚。昭和三十一（一九五六）年「椎の実」同人。昭和三十六（一九六一）年第五回菜殻火賞。

昭和四十六（一九七一）年「雲母」の飯田龍太に師事、同人。昭和五十四（一九七九）年句集「桐の木」により第三回現代俳句女流賞、昭和五十六（一九八一）年第五回雲母選賞。平成四（一九九二）年広瀬直人の「白露」同人。

優れた業績を重ねながら夫・季羊の後を受けて平成九（一九九七）年から「椎の実」主宰となり、六百号さらには六百五十号の記念号を発刊

するなど今も精力的に創作活動と後進指導に当たっている。
昭和五十五（一九八〇）年宮崎県文化賞（芸術部門）受賞。句集に「桐の木」「中啓」「自註　神尾久美子集」「山の花」。俳人協会名誉会員。

雪催ふ琴になる木となれぬ木と　久美子
鳥曇わが身叱るは声立てず
竹筒に山の花挿す立夏かな

## Ⅳ　県内俳句団体等の状況

### 1　県内の広域主要俳句団体

結社を超えて、俳句の振興と交流を目的に組織された広域の俳句団体がある。全国的組織としては、現代俳句協会、俳人協会、日本伝統俳句協会の三団体。県内には、宮崎県俳句協会・俳人協会宮崎県支部・宮崎県現代俳句協会の三つがある。

**◎宮崎県俳句協会**

宮崎県俳句協会が設立されたのは昭和四十一（一九六六）年八月。発端は昭和三十九（一九六四）年、宮崎俳句研究会の蛯原喜荘と小島静螂の、ともに三十代の若い俳人が、大分で行われる九州俳句大会へ向かう列車の中だった。

当時、伝統的俳句観と現代俳句志向が対立的にぶつかる流れがあった。それ以前、伝統俳句系と現代俳句系の両者が大同団結して昭和二十五（一九五〇）年七月に宮崎県俳句連盟を結成、昭和二十七（一九五二）年には県民俳句大会開催の企画を立ち上げたが、開催準備の段階で対立が激化し解散に突き進むという事態となった。

時を経て、なんとか状況を打破したいとの機運が芽生えた。喜荘・静螂の二人は指導的立場にある神尾季羊・山下淳に相談、その了解を得て県俳句協会の設立準備に入った。誘われて私もその準備作業に加わった。

昭和三十九（一九六四）年十月、設立趣意書発送。発起人は蛯原喜荘・小島静螂・山口苔石ら九人。昭和四十（一九六五）年十月発起人会。昭和四十一（一九六六）年八月、設立総会が開かれ、県俳句協会がスタートした。若手が運営委員会を構成し、県内俳壇の重鎮であった神尾季羊・山下淳・丸藤旅舟・前原東作・高松雀村・山中たから・竹内一笑は顧問として助言、協会の活動を見守る立場にあった。

発足時の会員数は八十人。初代運営委員長は山口苔石、事務局長は小島静螂。「俳句年鑑発行」「県民俳句大会開催」「会報発行」を県俳協の三大事業としてスタートさせ、定着させた。

いま最大の事業となった県民俳句大会は、第一回大会を宮崎県俳句連盟が企画したがその解散によって「椎の実」が引き継いで実施、県俳句協会設立を機に昭和四十一（一九六六）年の第十五回大会から協会がこれを引き継いで主催しているものである。平成二十二（二〇一〇）年十一月には六十回の節目を迎え、記念事業として「第1回～第60回県民俳句大会特選作品集」を刊行した。

これまで「宮崎県の俳句・戦後編」や「宮崎の季語　ふるさとを詠む」などを刊行し、俳句信条や主義主張を超え全県を糾合した組織ならではの意義深い事業を行ってきている。「宮崎県俳句年鑑」は四十七冊目、会報「野火」は百三十一号を重ねている。

なお特筆すべきは県民俳句大会に、小学生・中学生・高校生を対象にした「ジュニア俳句の部」を設けていること。昭和四十八（一九七三）年の第二十二回大会から毎年実施し、多くの子供たちが参加している。昨年の第六十回大会には千七百九句が寄せられた。

現在（平成二十四年六月）、協会の会員数は約五百六十人。俳人協会員・現代俳句協会員などということを意識することなく、県内の俳句愛好者・俳句関係者を網羅して多くの人が参加している。

**◎俳人協会宮崎県支部**

俳人協会宮崎県支部（支部長・石川誠一）は昭和五十四（一九七九）年一月設立、三十年の歴史を重ねて着実な活動を続けている。会員数約九十人（平成二十一年現在）。

**◎宮崎県現代俳句協会**

宮崎県現代俳句協会（会長・山口木浦木）は平成四（一九九二）年に設立されたが、これは西日本現代俳句協会が県単位に独立体となったものである。会員数五十人（平成二十一年十月現在）。

両団体は会報の発行・吟行句会など行い発展に努めている。

## 2　県俳協を牽引した人々

県俳句協会の今日があるのは、会員の協力はもとより顧問・役員の力が大きい。歴代名誉顧問（名誉会長）・顧問及び会長は次表のとおり。

歴代顧問等（現在名誉顧問・名誉会員はいない）

| 名誉顧問等 | 顧問 |
|---|---|
| 長田白馬＊<br>小田黒潮<br>鬼塚梵丹<br>神尾季羊<br>神尾久美子<br>竹内一笑<br>田崎暘恵<br>山下淳 | 神尾季羊・山下淳・丸藤旅舟・前原東作・高松雀村・山中たから・竹内一笑（以上協会設立時の顧問）<br>山口苔石・鬼塚梵丹・牧野吐龍・神野青鬼灯・橋本草郎・久保草洋（以上歴代）<br>蛯原喜壮・神尾久美子・小島静螂・高尾日出夫・遠井俊二・渡部昭波（以上現顧問） |

協会には以下の役員が置かれ、会長及び副会長（理事の互選）・理事・監事・事務局長・会計・企画委員（いずれも会長が委嘱）が会務遂行に当たっている。会務の運営にはとりわけ事務局長・会計・企画委員の力が大きかった。

歴代会長（昭和52年までは運営委員長の名称）

| 会長名 | 期間 | 特記事項 |
|---|---|---|
| 山口　苔石 | 昭和41年8月～昭和44年11月 | |
| 橋本　草郎 | 昭和44年11月～昭和46年11月 | |
| 久保　草洋 | 昭和46年11月～昭和62年11月 | |
| 遠井　俊二 | 昭和62年11月～平成7年11月 | 「宮崎県の俳句」刊行 |
| 小島　静螂 | 平成7年11月～平成11年11月 | |
| 渡部　昭波 | 平成11年11月～平成15年11月 | |
| 布施伊夜子 | 平成15年11月～平成23年11月 | 「宮崎の季語」刊行<br>「特選作品集」刊行 |
| 長友　畿 | 平成23年11月～ | |

## 3　県内俳句グループと俳誌

### ◎俳句グループ

戦後間もない昭和二十一（一九四六）年には山脈（やまなみ）句会・都城美句沙（つきみくさ）会・若竹句会・小林句会などがあり、その後、椎の実・佐土原暖流・水星・李・日向はまゆう・軸・流域・朴の芽・うづら・庄内・飫肥俳友・えびの・延岡若鮎・馬酔木などのほか各地の病院句会など幾多の俳句会が生れては消えた。県内にはいま八十九の俳句会・俳句グループがある（平成二十四年七月現在）。地区別には次の通り。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 宮崎東諸地区 | 40 | 日南串間地区 | 4 |
| 小林えびの地区 | 2 | 都城北諸地区 | 8 |
| 西臼杵地区 | 3 | 西都児湯地区 | 8 |
| | | 延岡日向東臼杵地区 | 24 |

グループの規模や句会等の実施状況はさまざまであるが、それぞれ指導者・代表等を置いて活動を続けている。

### ◎主な俳誌

県内で戦後いち早く生れたのは「椎の実」。その後、「遠野火」「火山脈」「錆」「流域」「李」「海鳥」「潮騒」「青銅通信」「月桃」などが生れた。現在定期的に発行されているのは次の七誌である。

◇「椎の実」　昭和二十四（一九四九）年十一月創刊、同二十七（一九五二）年七月から小田黒潮が主宰、同二十九（一九五四）年から神尾季羊が主宰となり、平成二（一九九〇）年八月「創刊四百号記念号」を発刊。平成九（一九九七）年六月季羊没後は、神尾久美子があとを継ぎ同年七月「創刊五百号記念号」、さらに平成十九（二〇〇七）年三月には地方俳誌としては異例ともいえる「創刊六百号記念号」、平成二十三年（二〇一一）年五月には「創刊六百五十号記念号」を発行した。現在通巻六六四号。発行人神尾久美子・編集長布施伊夜子。

◇「軸」　昭和五十一（一九七六）年創刊の「みやざき暖流」を昭和五十三（一九七八）年「軸」に改め軸俳句会機関誌として発行。代表・山口苔石のあとを渡部昭波・長友砂峰が継いで現在百二十号。編集発

行責任者長友砂峰。

◇「流域」　昭和四十五（一九七〇）年七月、山下淳を代表とする宮崎俳句研究会同人誌として創刊。現在第九十八号。発行人福富健男・編集人服部修一。

◇「錆」　前身は昭和三十六（一九六一）年一月創刊の宮崎俳句研究会機関誌、昭和四十五（一九七〇）年十月第二十八号で終刊となったが、昭和五十一（一九七六）年一月同人誌として復刊第一号を発行。現在第四十五号（通巻すれば第七十三号）。発行人小島静螂・編集人長友巌。

◇「潮騒」　平成四（一九九二）年十二月福富健男が指導する「河童の子の会」が俳句入門誌として創刊。現在第三十八号。発行人福富健男・編集人妹尾題弘。

◇「青銅通信」　平成十九（二〇〇七）年九月、岩切雅人が指導する通信句会「青銅の会」の誌上句会誌。現在第二十五号。発行人岩切雅人。

◇「月桃」　平成二十四（二〇一二）年六月創刊、発行人石川誠一（宮崎句会代表）。

## V　まとめ

「みやざきの俳句」といっても、つまりは全国的な大きな流れの中にある。虚子の掲げた「花鳥諷詠・客観写生」の伝統俳句の流れを中心に、虚子と袂を分かつ形で始まった「新興俳句」運動の流れを受ける「戦後俳句」の社会性俳句や前衛俳句、そして現代俳句まで多様な展開を見ることができる。

文学、とりわけ俳句は風土のなかで生まれる。宮崎の風土といってまず浮かぶのは、さんさんと降り注ぐ太陽、澄んだ空気、緑の山河、色鮮やかな花々、涯なく広がる空と青い海原、神話伝承――だろうか。私たちの俳句は、風土を構築する光・風・草木・山地・海・川・歴史・そして人々の暮らし、これらによって造り上げられたものであることは間違いない。特色は南国性、向日性だろうか。

全国的傾向と少しだけ違うのは、宮崎県俳句協会という組織である。先に述べたように、本県の場合、俳句信条等を超えて県内ほとんどの俳句愛好者・俳句関係者が宮崎県俳句協会の会員である。

これは全国的に見ると珍しく、ほとんどの都道府県が現代俳句協会系と俳人協会系等に分かれていて相互の交流はないようである。この点、われわれは大いに胸を張っていいのかもしれない。県民性もあるだろうが、かつて対立の危機を乗り越えた先輩諸氏の知恵と意志を忘れてはならない。

最後に、本稿は資料収集も分析考証も十分でなく、その概要を述べたに過ぎない。どなたか深めていただくなら幸いである。

〈参考文献等〉

『俳句・名句と宮崎の秀句に学ぶ』長友巌（あすか企画）
『宮崎県の俳句・戦後編』宮崎県俳句協会
『宮崎県俳句年鑑（各年版）』宮崎県俳句協会
『みやざきの文学碑・増補改訂版』宮崎県芸術文化団体連合会
『第1回～第60回県民俳句大会特選作品集』宮崎県俳句協会
『河童手帳・現代俳句編』福富健男（鉱脈社）
『日向路の山頭火』山口保明（鉱脈社）
『現代の俳人101』金子兜太編（新書館）
『俳句辞典　近代　増補版』松井利彦編（桜楓社）